

特別寄稿

中国における日本古代中世史研究（綱要）

張 玉 祥

—目 次—

研究の機構

著作と訳書

学術討論

- 一、邪馬台国の位置について
- 二、古代社会の性質について
- 三、封建社会に入った時期と封建社会の発展段階について

専門的問題についての研究

- 一、日本封建制度の特徴について
- 二、日本封建社会における農民運動について
- 三、幕末史について
- 四、歴史的人物の評価について
- 五、古代中世における中日関係について

文中に触れた論文・著作の著者の横顔

遼寧大学日本研究所について

研究の機構

解放前、中国において組織的な日本歴史の研究はなかったし、成果も極めて少なかった。1949年新中国が成立して以来、各大学の歴史科には普遍的に世界歴史とアジア各国史などの科目が設けられた。そのうち日本歴史は重要な位置におかれ、またいくつかの大学には日本近代史・現代史・戦後史などの科目をも設け、個別の学校には日本史の研究機構も設置された。このように、朱謙之・呉建璠・周一良・鄒有恒ら日本史専門家の先達の導きの下に幾人かの日本史研究を志す若い学者達が勢いよく現われて来た。そのため、1965年まで八百篇ほどの論文が発表され、百種に余る著作と訳書が出版された次第である。しかしこれらの成果の大部分は近・現代史と戦後史に属するもので、古代中世史分野のものは極く稀で、研究者も少数であった。その後、いわゆる“文革”の期間は研究の仕事をすべて停止せざるをえなかった。1972年、中日国交恢復が実現し、人々は古代中世史を含めてのあらゆる方面から日本を知ろうとす

る気運が高まるようになった。1976年の秋に四人組が遂に打倒され、サイエンス（科学）の春が訪れ来て、日本史研究の仕事は未曾有の規模とスピードをもって展開されて来た。

いまのところ、中国には日本史の研究機構としては、中国社会科学院世界歴史研究所に属する日本史研究室・天津社会科学院・遼寧大学・吉林社会科学院・吉林大学などに設けられた日本研究所日本史研究室・北京大学・南開大学・復旦大学・河南大学などに設けられた歴史科日本史研究室、東北師範大学の外国問題研究所日本史研究室・武漢大学の十五・六世紀世界史研究室にある日本史研究組などがある。これら日本史研究室に属する研究員の一部分は古代中世史の専攻である。例えばわが研究室は全員八名の中四名は古代中世史と古代中日関係史専攻である。なおこれら研究機構以外に全国各大学歴史科にも日本史専攻の人は少なくない。

日本史研究が日増しに発展する情勢に対応して、1980年から我国には、ひき続いて全国的乃至は地方的な日本史と中日関係史の学術団体が設置された。主たるものとして中国日本史学会（1980）・北京中日文化交流史研究会（1980）・東北地区中日関係史研究会（1980）・吉林日本学会（1981）・遼寧省中日関係史研究会（1982）及び中国中日関係史学会（1984）などがある。

中国日本史学会は全国的・大衆的な学術団体であって、1980年成立して以来全員大会二回、会員の代表会議二回がそれぞれ開催された。現在会員数は三百名の多きに達し、学会の下に古代中世史・近代史・現代史・戦後史・中日関係史など五つの分部会が設けられている。古代中世史分部会は46名の会員をもっている。

著 作 と 訳 書

中国日本史学会が成立して以来、数量的にはあまり多くないが著作や訳書などが逐次出版された。古代中世史分野では、遼寧大学日研所歴研所の共著《日本簡史》、汪向荣氏の《邪馬台国》、伊文成・王金林・賈玉琴氏の監修《日本歴史人物伝》、王建群氏の《好太王碑研究》、王金林氏の《簡明日本古代史》と《古代の日本》（最近日本六興出版社の出版）などが数えられる。中日関係史面では、王金林氏など共著《中日両国人民的友誼源遠流長》、《鑒真》、汪向荣氏の《鑒真》、吳建璆氏の《中日文化与交流》などがある。訳書としては、鄒有恒氏と呂元明氏の共訳《古事記》、遼大日研所歴研所の共訳《天皇制》（井上清氏著）、天津社科院日研所の《日本歴史》（三冊、井上清氏著）、胡錫年氏の《日中文化交流史》（木宮泰彦氏著）などがあり、《源氏物語》と《万葉集》の訳書も出版された。

まもなく出版すべく計画されているものは吳建璆氏と易顕石氏の監修《日本通史簡編》（三巻）、張聲振氏の《中日関係史》（二巻）、天津人民出版社の《日本歴史人物評伝》、王金林・任

鴻章・沈仁安諸氏の監修《中日関係二千年》(三卷), 吳杰氏監修の《日本史辞典》, 南開大学日本史研究室の《日本歴史教材》及び張玉祥と沈仁安監修の《日本古代中世史》などである。

学 術 討 論

古代中世史分支部会の主要任務は学術の討論を組合せることで、成立して以来、学術討論を四回も組合せた。討論された問題は大体次の如くである。

一、邪馬台国の位置について

近く中国学者達は日本史学界の邪馬台国の所在地についての論争を非常に重要視し、引続き著作と論文を発表、討論も重ねている。

(1) 鄒有恒氏は、この問題について日本史学界の研究は停滞したままで、文献から見てその研究はもう項点に達し、一歩進めることは容易でないと述べ、突破は新しい考古の発掘に俟たねばならないとの見解を示している。

(2) 汪向榮氏と張声振氏は大和説の主張である。汪氏は生産力水準の状況が邪馬台国所在地断定の鍵だとの理論を提起し、弥生後期に生産力水準の最も高かった所は畿内であると強調した。張玉祥はまず《倭人伝》が不弥国から邪馬台国までの里程を里数で計算しないで日数で計算した原因を究明、次にこの計算された里程から検討した上邪馬台国は正しく畿内に所在していたとの結論を得た。

(3) 王金林氏は九州説を堅持すると同時に畿内に相当発達していた前大和国が存在していたという新説を提起し、また邪馬台国成立の年代についても新しい見解を示している。それによると、邪馬台国の成立は一世紀の末乃至二世紀の初のこと、これまで二世紀の末或は三世紀の初ころ成立したという伝統的な見方を否定した。

(4) 吳建璆氏は汪氏説に反論して、生産力の水準だけで判断すべきではない、大陸文化を容易に受け入れ、階級矛盾と階級闘争が先鋭である九州地方に邪馬台国はあったと力説した。

代表的な論・著

1. 鄒有恒氏：論文《古代邪馬台国所在地争論浅見》(《日本史研究》1982)
2. 汪向榮氏：著作《邪馬台国》(中国社会科学出版社1982)
3. 張声振氏：論文《〈魏志倭人伝〉中邪馬台国地理方位弁》(《日本史論文集》一輯1982)
4. 王仲殊氏：論文《關於三角縁神獸鏡的問題》(《考古》1981)
5. 吳建璆氏：著作《中日文化与交流》(中国展望出版社1984)

6. 王金林氏：論文《邪馬台国の若干問題》（日本別府大学での講演稿1984）
 著作《簡明日本古代史》（天津人民出版社1985）
 著作《古代の日本—邪馬台国を中心として》（六興出版社1986）

二、古代の社会性質について

この問題はとても複雑でしかも解決し難く、社会発展の法則と関連をもっている。比較的深く検討されたのは主に次の諸点についてである。

(1) 邪馬台国の社会性質について

① 階級社会なのか、それとも非階級社会なのか、その一は氏族社会末期説である。この説は当時階級国家というものが未だ存在せず、かりに存在していたとしてもただ部落国家であった、というものである。その二は階級社会説で、これによると、邪馬台国がエンゲルスの指摘している国家としてそなえるべきいくつかの特徴を既に具備していたということである。

② 階級社会だとすれば、結局どんな階級社会の性質に属するのか。学者の大多数は奴隸社会、部分的には移行する段階にある社会だと主張している。

(2) 部民の性質について

この問題は大和社会の性質を確定するかなめで、二つの見解に分かれている。まず王金林氏の見解によると、部民は単一の階級でなくて、三つの型をもっている、すなわち奴隸型・コロタス型及び農奴型であって、部民制は奴隸制でなくて、コロタス型が次第に農奴型に発展したものとなる。従って大和社会は原始社会から直接封建社会に移行する段階である。

次に張玉祥と禹碩基氏の奴隸制説では、部民は奴隸階級に属し、二種類に分けられている。即ち“純粹奴隸”の型と“貢納奴隸”の型で、両型ともに人体を完全占有するという基本的な共通点をもっている。だから大和社会は奴隸社会であると言えるのであると。

(3) 大化革新の性質について

やはり二つの説があり、その一は張声振氏と王文定氏を代表とする奴隸社会の発展途上における政治改革説、その二は張玉祥及び禹碩基氏と王金林氏を代表とする封建制の改革説である。

前説の主要根拠として、当時は生産力の発達の水準があまり高くなく、従って生産関係の改革を行なう前提的条件が未だ明らかでない、班田農民の身分が寧ろ奴隸に近づき、或はもとの貴族に属せる奴隸が未だ解放されていないことなどがあげられている。

これに対し後説の主な根拠としては、革新後の土地所有制度は封建的国家土地所有制度であり、律令制により班田農民と封戸は明らかに奴隸ではなくて国家に隷属する農民であること、

などがあげられている。

代表的な論著

1. 趙歩雲氏：論文《邪馬台国社会性質初探》（《史学月刊》1985）
2. 趙秉新氏：論文《邪馬台国的社会性質》（《日本史論文集》第二冊1985）
3. 孫義学氏：論文《試論日本從奴隸制向封建制過渡的問題》（《學術論文集》1981）
4. 王金林氏：①前掲二冊の著作
 ②論文《從〈魏志倭人伝〉看邪馬台国的社会性質》（《文稿与資料》1980）
 ③論文《日本古代部民的性質兼論日本未經奴隸制社会》（《歷史研究》1981）
 ④論文《曹魏与邪馬台国關係淺析》（《日本情況參攷資料》1981）
 ⑤論文《奈良時代日本の社会階級》（《日本史論文集》第二冊1985）
5. 張玉祥・禹碩基氏：①論文《論日本奴隸制向封建制的過渡分》（《歷史研究》1982）
 ②論文《平安後期日本社会經濟關係的变化及其性質》（《日本史論文集》1982）

三、封建社会に入った時期と封建社会の發展段階について

(1) 日本が封建社会に入った時期について

この問題について、日本の学者の間で極めて多くの見解があるが、その主流はおそらく鎌倉説であろうと思う。私の理解では、この説の主要な理論的根拠としては武士の領主土地所有制と主従制であると思う。私共は検討のすえ、平氏政權説（張声振氏）、鎌倉説（王文定氏を代表とする）と大化革新説など三説を提起し、その内大化革新説が優勢を占めている様子である。この説は五十年代に吳建璠氏が彼の《大化改新前後日本社会性質問題》という論文の中に提起されたもので、近年張玉祥、王金林、禹碩基、孫義学諸氏の著文によって更に充実されるに至った。張玉祥はこれを理論的問題として強調し、今後の検討に役立つようにとの考えから、封建制度と総体奴隸制に含まれている意義に対し、自分の見方を明らかにした。

(2) 封建社会の發展段階について

まず各段階区分のスタンダードについて、ある人は政治經濟の総合スタンダードによるべきだと主張し、ある人は土地所有形態又は經濟形態を唯一のスタンダードとしている。具体的な区分はさまざまで、例を上げると、童雲揚氏は三段階を主張して、大化革新～鎌倉幕府の形成を第一段階——形成時期、鎌倉時期～元禄時期の始めを第二段階——發展時期、元禄時期～徳川末期を第三段階——衰退時期としているが、張玉祥は四つの段階に分け、第一段階を形成と確立時期（大化革新～十世紀初の奴婢解放令）、第二段階を發展時期（十世紀の初期～戦国時

代末期)、第三段階を再発展時期（織豊政権～元禄時期）、第四段階を衰退時期（享保改革～徳川末期）としている。

代表的な論・著

1. 王文定氏：論文《試論大化革新的性質》（《日本研究》第二期1985）
2. 王金林氏：前掲の論・著の①③⑤
3. 張玉祥：論文《確定日本封建社会始期的两个理論問題》（《日本研究》一期1985）
4. 通信《中国日本史学会古代中世史分会第三次學術討論會》（《日本研究》一期1985）

検討された問題は現在のところ大体これ位のものである。日本古代中世史に属するすべての重要な問題、特に理論面の問題及び論争のある問題については今後とも検討して行く予定である。例えば庄園制度とか、大名領国制とか、幕藩体制とか、日本封建制の特徴とかいうような問題はそれである。討論に参加する人は論文を出さねばならず、これら論文は大部分刊出された。

専門的問題についての研究

多くの専門的問題の研究は未だ討論に及ばず、大体次のような課題を抱えている。

一、日本封建制度の特徴について

この問題については、多少研究成果を上げている。年若い研究者劉毅氏と王家驊氏が《試論日本早期封建制度的特点》と《半欧州半亜州型的日本晚期封建社会——兼論近代中国与日本走上不同道路的原因》という二篇の論文をそれぞれ発表している。二篇の論文はともに日本の封建制度を中国及び欧州のそれと対比して分析し、日本の封建制度は早期にも晩期にも東方と欧州の特徴を双方とも兼ねているという結論に達した。

趙宝库氏と若い学者李卓氏・姚凱氏等がそれぞれ庄園制・郷村制及び城下町などの諸問題に対する研究を通じて、日本封建制の特徴を探っている。

張玉祥は日本封建制の形態を一つと見做さず、それは国家封建制から貴族領主制封建制へ、さらに武士領主封建制へと、順次になって来たものであるという意見を出した。

二、日本封建社会における農民運動について

中国の研究者達は常に封建社会における農民運動を、封建社会の発展を推し進める重要な原動力であるという立場に立って、中国或は世界各国の封建社会の歴史を研究する上で、農民運

動の研究を非常に重視している。こういう訳で、五十年代と六十年代に中国の学者は日本中世史における農民運動に関する論文をすでに若干篇発表しているし、近年になってまた若干篇の論文が発表されている。例えば童雲揚氏の《室町時代酒屋土倉与農民運動》・張玉祥の《日本中世紀加賀国一向宗門徒起義的几个問題》及び李威周氏の《室町戦国時代的農民戦争》などである。これらの論文の中にはとくに童文は徳政一揆の歴史的意義について、一揆が高利貸資本にきびしい打撃を加え、商業資本と対外貿易の発展を力強く推し進めたという大いに検討価値のある見解を発表している。

三、幕末史について

明治維新の社会的背景を明らかにするため、多くの学者が幕府末期の状況に関する論文を数多く発表しているが、主として幕府末期における階級的関係の変化、倒幕思想と倒幕派の形成に関するものである。例えば劉天純氏の《幕藩体制的崩潰与反封建闘争》・金基鳳氏の《倒幕派的形成及共階級基驛》・王家驊氏の《幕末日本人西洋観の変遷》・李秀石氏の《明治維新的先駆——吉田松陰》及び馬家駿氏の《幕府末期的日本資産階級与下級武士》などがそれである。

四、歴史的人物の評価について

1984年に出版された《日本歴史人物伝》（古代中世篇）の中には、七十人の人物をとりあげており、近々出版される《日本歴史人物評伝》の中にも古代中世史に関係する人物を十人あまり書いている。歴史的人物をいかに評価するかという点については、これを歴史的・客観的・全面的に、または実情に即して見なければならず、すべてが良いとか、すべてが悪いとかいう見方ではいけないという点で、意見の一致を見ている。

豊臣秀吉という歴史的人物を例としていうと、秀吉の日本統一と彼の打出した対内政策は日本社会の発展に役立つものであり、彼の功績であると思なすべきである。しかし対外的に常軌を逸した侵略政策を押し進めたことは大きな過ちであると評価しなければならない。楠木正成についていえば、彼が倒幕に参加することは正しいことで、しかも大手柄を立てたのであるが建武政権を守ったことは人々の反感を買い、過失を犯したと言うべきである。いずれにせよ、彼は優れた軍事家であって、戦略戦術に通曉し、人格的にいい人なので適切な評価をすべきであるという意見である。

五、古代中世における中日の関係について

近年来，中日関係史を研究する人はとても多い。書かれた文章は何百篇にも達し，その内大部分は近代及び現代の範囲に属するものだが，古代中世の範囲内にあるものも少なくない。古代や中世の範囲内の論文は大体次の如く三つの特徴をもっている。

(1) テーマ選定は唐代に限るせまい範囲を突破し，唐代以前の時期と唐代以降の時期に拡大展開しつつある。例を取って見ると，石器時代における文化交流に関する論文は三篇も出されており（張之恒氏・張玉祥・禹碩基氏等の論文）。若い学者管寧氏が《先秦漢魏時期中日文化交流弁》を，方安発氏が宋元時期における中日関係に関する論文をそれぞれ発表している。その他，倭寇と勘合貿易に関する論文も何篇もあり，清代における貿易関係を専攻している任鴻章氏は，《享保年間中国日本的長崎信牌貿易》を始め数多くの論文を発表している。なお仮名文字の形造りの過程を中心に広範に中日文化交流を論じる徐徳源氏の論文も出されている。

(2) 一般的な文化交流と友好往来の局限を突破し，もっと深刻な意義のある論文も発表されている。例えば王金林氏と趙健民氏の《論古代中国日本間的三次戦争》はそれを先がける論文と言うべきであろう。この論文は両国の古代中世における三回にわたる戦争（白村江の役・元朝の日本侵略の役・豊臣秀吉の朝鮮侵略の役）の発生原因及び発動とそれが生じた影響など幾多の方面から系統的にまとめ，三回の戦争は何れも中日朝三国民衆の親善友好の共通の願いに反すること，三回の戦争から汲むべき教訓は中日両国が平和友好と平和共存を保つことであると指摘した。この論文はモデルともいうべき，中国のいわゆる“古為今用”（古いものを整理し，いいところを吸収して新しい社会の前進に役立てる）に則った論文である。張玉祥は《豊臣秀吉侵朝期間日本軍民的反戦闘争》なる論文を発表し，事実をもって侵略戦争の発動は国内の人々の反感をも買っていることを力説している。

(3) 研究課題はますます細密化し，研究の深度も深まりつつある。胡錫年氏の《唐代的日本留学生》とか，田久川氏の《中国古代天文歴学科学在日本的流传及其影响》とか，孫徳昌氏の《従日本唐式建築看中日文化的交流》など論文からこういう特徴が伺われる。

文中に触れた論文・著作の著者の横顔（文中に出現した順序による）

- 呉 建 璆氏 南開大学歴史研究所所長・中国日本史学会会長
 鄒 有 恒氏 東北師範大学日本研究所所長・中国日本史学会副会長
 周 一 良氏 北京大学歴史系主任・中国日本史学会副会長
 王 金 林氏 天津社会科学院日本研究所副所長・中国日本史学会秘書長
 汪 向 榮氏 中国社会科学院世界歴史研究所

- 伊文成氏 東北師範大学日本研究所・中国日本史学会近代史分部部长
賈玉琴氏 吉林社会科学院日本研究所
呂元明氏 東北師範大学日本研究所
胡錫年氏 陝西師範大学歴史系・中国日本史学会中日関係史分部部长
易顯石氏 遼寧大学日本研究所歴史研究室主任・中国日本史学会中日関係史分部部长
張声振氏 吉林社会科学院日本研究所歴史研究室主任・中国日本史学会古代中世史分部部长
任鴻章氏 遼寧大学日本研究所所長・中国日本史学会副秘書長
沈仁安氏 北京大学歴史系日本史研究室主任・中国日本史学会古代中世史分部部长
吳杰氏 復旦大学歴史系日本史研究室主任・中国日本史学会副會長・戦後史分部部长
張玉祥 遼寧大学日本研究所・中国日本史学会古代中世史分部部长
王仲殊氏 中国社会科学院考古研究所所長
禹碩基氏 遼寧大学日本研究所
王文定氏 天津師範大学歴史系
趙步雲氏 河南大学歴史系
趙秉新氏 中国人民大学歴史系
孫義学氏 東北師範大学歴史系
童雲揚氏 武漢大学歴史系
劉毅氏 遼寧大学日本研究所
王家驊氏 南開大学歴史研究所日本史研究室
趙寶庫氏 武漢大学歴史系
李卓氏 南開大学歴史研究所日本史研究室
姚凱氏 武漢大学歴史系
李威周氏 山東大学哲学系
劉天純氏 中国社会科学院研究生院・中国日本史学会現代史分部部长
金基鳳氏 延邊大学歴史系
李秀石氏 上海師範大学歴史系
馬家駿氏 北京師範大学歴史系主任・中国日本史学会近代史分部部长
張之恒氏 南京大学歴史系
管寧氏 北京社会科学院日本研究所
方安堯氏 浙江師範大学歴史系

趙 健 氏 復旦大学歴史系

田 久 川氏 遼寧師範大学歴史系主任

徐 徳 源氏 遼寧大学歴史系

遼寧大学日本研究所について

中日国交の回復を迎え、1971年に成立。日本の政治・経済・歴史・文学を研究し、遼寧省における唯一の日本総合研究の機構である。今全員32人、所長は任鴻章副教授、副所長は金明善副教授と楊遇雲氏である。研究所は事務室一つ、研究室三つ（日本経済研究室、日本歴史研究室、日本政治・文学研究室）、資料室一つ及び《日本研究》（刊行物）編集室一つをもっている。

いままで《現代日本経済》・《日本法律概論》・《日本簡史》・《九一八事変史》など約八部の著書、《大東亜戦争史》（服部卓四郎氏著）、《天皇制》（井上清氏著）など十数部の訳書が出版され、論文200余篇が発表された。資料室の蔵書約三万冊、その内日本で出版されたもの約二万冊、日本の新聞七部、逐次刊行物百部以上という状態である。近年来、学術の交流を目的として来た日本学者は十四・五人に達し、今後両国の文化交流がますます密接になるに従って、さらに多くの方が来られるであろう。

日本史研究室は主任の易顯石氏ほか七人の成員をもっている。その内古代中世史の専攻は四名、近現代史の専攻は三名、この他在学中の近現代専攻の修士研究生が二人いる。張玉祥副教授・禹碩基講師と劉毅講師は古代中世史・任鴻章副教授は清代にける中日関係、朱守仁副教授と孫承講師は近代史、易顯石主任は現代史を専攻する。

歴史研究室成員の研究の業績として出版された書物は上掲《日本簡史》・《九一八事変史》（他人との合作）の外に《日俄戦争簡史》があり、訳書には上掲訳書の外《東条英機伝》もある。まもなく出版される著書が《日本通史》（三巻・南開大学との合作）、《中日関係二千年》（三巻・他校との合作）及び《東北地区中日関係史》（約十巻）などである。計画中の出版物には、《日本古代中世史》（他校との合作）と《日本帝国主義侵華史》がある。